SIAF2024ビジターセンタートーク

アーティストが語る、札幌の今

2024年2月23日（金・祝） 17:00〜19:00

会場：多目的室（SCARTSスタジオ）

登壇者

SIAFラボ（小町谷圭、石田勝也、船戸大輔、平川紀道）

内田聖良（アーティスト）

佐藤壮馬（アーティスト）

進藤冬華（アーティスト）

モデレーター：樋泉綾子（札幌文化芸術交流センター SCARTS キュレーター）

目　次

・札幌の印象と活動の場として選んだ理由
　―アーティストが感じる「呪いのようなもの」とは何か？
・札幌と他都市の違い―アクセスとコミュニティ
・札幌にアートは必要なのか問題―逆に札幌に必要なアートとは何か？
・SIAF2024の読み解き方とおすすめルート
・アーティスト／観客、内／外の視点の交差が街を面白くする

本稿は2024年2月23日に行われたトークイベント内容をダイジェスト版として編集したものです。

札幌の印象と活動の場として選んだ理由
―アーティストが感じる「呪いのようなもの」とは何か？

樋泉綾子（以下、樋泉）：皆様ご来場ありがとうございます。本日の進行を務めます札幌文化芸術交流センターSCARTSの樋泉と申します。今回このSIAF2024の中で、SCARTSは「札幌の今」をコンセプトとした芸術祭のビジターセンターとして機能しています。このビジターセンターのコラボレーターとして、SCARTSモールCで「都市と自然をめぐるラボラトリー」という展示を展開しているSIAFラボの皆さんから本企画のご提案があり、現在札幌を拠点に国内外で活動する3名のアーティストをお招きしています。札幌ご出身なのは進藤冬華さんのみで、他の皆さんは別の土地から札幌に移住して活動されている方たちです。こうした外側からの視点を交えて札幌という街を眺めてみたいというのが、今日の狙いのひとつでもあります。また、例えば「札幌で作品を発表してもなかなか反応がない」「道外アーティストの作品に触れる機会が少ない」というような札幌の現実がある中で、今日は皆さんの視点を交差させながら、札幌という街を面白くポジティブに捉えられるような新しい視点を得られる機会になればという思いで臨んでおりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

（各登壇者からの活動紹介）

樋泉：皆さん、それぞれの活動についてご紹介ありがとうございました。では早速質問をしていきます。皆さんの作品制作のアプローチのひとつとして、リサーチを通して札幌の街を捉えていくということがあると思います。

札幌の都市機能と自然環境をテーマに活動されているSIAFラボは、小町谷さん、平川さん、石田さんが道外出身、船戸さんは十勝出身ですね。まずは札幌のファーストインプレッションについてお聞きしたいと思います。

石田勝也(以下、石田):僕は実家が名古屋で、大学で初めて北海道に来ました。名古屋という街がとても嫌いだったのと、東京という大きな都市に憧れていたけれどもあまり勉強ができなくて、でも建築をやりたいと思って探して入れたのが室蘭工業大学でした。初めて東室蘭の駅に降り立ったとき「世界の果てに来た」と愕然としたのが、北海道に対する最初の印象です。室蘭工業大学は登別との市境にあるので、自分は登別の下宿に住んでいて、高台にあった部屋からは東室蘭の港が見えました。夜になると高炉からの青白い炎が煙突からバーッと上がっているのが印象的な風景だったのですが、ちょうど室蘭の町は鉄冷えの高炉が休止するタイミングで、その炎がある日突然消えて。そのことが僕としては、北海道や工業というものの関係を感じた象徴的な体験でした。自然の印象ももちろんあるのですが、その後ろにある鉄や石炭、エネルギーというものも含めたものが北海道と自分というものの原体験としてあります。それは今のラボの活動に少し通じるものがあるかもしれません。

樋泉:工業都市としての室蘭が石田さんにとっての北海道の原風景なのですね。船戸さんはどうでしょうか?

船戸大輔(以下、船戸):私の地元は十勝地方の士幌町という、人口より牛が10倍ぐらい多いところです。大学から函館に7年間住んでいました。札幌に来るきっかけとしては、2005年か2006年に石田さんと音楽家の大黒淳一さんがモエレ沼公園で開催した、「モエレメント」というイベントに作品を出したことが最初です。上の世代の方々が打ち合わせで喧々諤々とやっていて、札幌には面白い方がいて、文化の土壌があるのだなと思って。それから20年近く経って、ラボの活動の中でもそのような場をつくっていかなければと思っているところです。札幌は都市と自然が近いというのもありますし、東京にもすぐ行けるし、都合が良い。それを生かした上で何ができるのか実験できるということもあって、ラボの中では札幌ならではのクリエイティビティを模索する研究開発(R&D)をしているのですが、フィールドとしてそういうことができる街という印象を持っています。

樋泉:札幌の文化的な土壌と、地理的にも活動を展開しやすいイメージがあるということですね。ありがとうございます。平川さんはSIAFラボの活動には途中から加わっていますが、その辺りもふまえて札幌に来てみての印象を聞かせていただけますか?

平川紀道(以下、平川):僕は18年間島根県で育ち、18年間東京にいて、2019年に札幌に移ってきました。最初の印象はもう忘れてしまったのですが、繁華街があって、そこから歩いている間に川が見えたり山が見えたりして、距離感が魅力的だなと思った記憶があります。少し話を変えてもいいですか?今日は「アーティストが語る、札幌の今」というざっくりとした話題で3人をお呼びしてしまったのですが、3人の制作アプローチはSIAFラボと全然違いますよね。皆さんの作品は、個人的だったり土着のものだったりというように個別のことからスタートしながらも、それが観る人の中でどこか普遍的なものにつながっていくと感じました。SIAFラボには完全にそれがないと言うか、データなどを用いて「札幌はこうだ」という話

ばかりしていて、ある意味呪いのように札幌のことをやっている。SIAFラボのプロジェクトには、観る人が感情移入できる部分が少ないと思いました。冒頭で樋泉さんからご紹介があった通り、3人には札幌の外で活動されていて外の視点があるということでお声がけしたのですが、今の僕の印象だと皆さんは別に札幌拠点じゃなくてもいいのではないかという感じもしていて、札幌にいる意味を改めて聞いてみたいと思いました。

樋泉:内田さんは札幌に来る前に秋田と青森で6年半くらい活動されていますよね。札幌との違いということでもいいですし、今札幌にいる理由も含めて、札幌ではどんなことができそうかとか、こんなことにモヤモヤしている、などがあればお聞きしたいです。

内田聖良(以下、内田):青森に住んだ直接のきっかけは、秋田での大学勤務の任期が終わるときに安く借りられる一軒家を紹介してもらったことですが、秋田にいるときから、青森の物語やスピリチュアルな文化に興味を持っていました。たとえば、青森には「キリストの墓」「ピラミッド」「日本中央の碑」など思わず嘘だろと言いたくなる伝説がいろいろあるのですが、それが観光施設になったり、道路標識に載るくらい、真面目に大事にされているんですね。ファクトかフェイクかの議論に終始したり、考え方の違いで分断しがちな中、嘘かどうかに関わらず大事にされている物語やその流通のあり方から、学ぶことがたくさんあるのではないかと。物語づくりの自由さや見えないものとの関わりを肌で感じることができてとても面白い環境だったんですが、一軒家に一人暮らしだったので、冬は一日家をあけたら家に入れなくなるぐらい除雪が大変で(人口10万人以上の都市で比べると、青森市は札幌市より積雪量が多くて世界一という記事を見ました)。現代美術で活動するとなると、青森で発表するだけでは成り立たず家を開けることも増えると思うので、このまま続けるのは厳しいかなと。また青森は美術館が多いことで有名だと思いますが、美大は無いんです。なので、特に私と同じ現代美術やメディア・アートの領域で活動する作家さんが近くにほとんど住んでいない。作品のアイデアやテクニカルな相談を気軽に話せる機会がなくて、そのあたりに閉塞感を感じたかもしれません。そんなときにたまたまパートナーが小町谷さんと同じ大学に勤めることになり、北海道と青森は距離的に近いし、私の関心ともつながりを見つけられるかもしれない、コミュニティもありそうだと思い移住を決めました。札幌へ来てみると、先ほど船戸さんが「実験」という風におっしゃっていましたが、そういう精神というか、すぐに壊して作り替えるところが面白いと思いました。お寺の屋根も三角ではなく、屋根の四角い公民館のようなお寺がいっぱいあって。札幌の人たちにそれを言うと「え?普通じゃない?」みたいな反応で、ここでは当たり前なんだなと。あと本州にいたときは知らなかったのですが、北海道にはオホーツク信仰や擦文文化など縄文とは違う歴史があり、(さっぽろ天神山アートスタジオのAIR ディレクターの)小田井さんに協力してもらってリサーチさせてもらいました。それは日本という境界線が解ける感じがして、すごく面白い体験でした。

樋泉:佐藤さんにも、東京とロンドンでの活動を経て、今札幌にいる選択をされていることについてお伺いしたいです。

佐藤壮馬(以下、佐藤):僕は日本に帰ってくるとき、北海道に住んでやりたいという気持ちが強くありました。適度な疎外感がすごく良くて、いろいろな展覧会に行ったりできないという現実もありますが、ある程度集中して何かに向き合うことができる。僕は特に冬が大好きで、昨日からもすごい雪が降っていますが、人工的に作られた建物、幾何学的な形をしているものが、全て自然の造形に覆われて、歩道なども雪で覆われる。人が歩いた跡を次の人が辿っていったり、滑らないように気をつけたり、都市で自分の身体感覚が野生の感覚に少し戻るような感覚がある。冬の寒い状況が、身体的に研ぎ澄まさせてくれる感覚があります。一番大きいのは「美しい」というところで、自分の中で大きなインスピレーションになっています。時々「なぜこの場所で芸術活動をしなきゃ

いけないんだろう」と考えさせられることもあります。圧倒的な美しいものがあり、それを体験しているということを、超えられるようなものはあるのかなと。普通にキャンプに行ってバーベキューをしている方が楽しいし、星を見ていたらきれいだし、文化的な活動をこの場所でする意味は何なのだろうとすごく考えさせられます。

樋泉:ここでなぜ芸術的な活動をしなければならないのかという問いは、SIAFラボにもあると思います。進藤さんにもお聞きしたいのですが、これまで活発にレジデンスでいろいろな都市を周ったり、留学もされたりした後で札幌に帰ってきて、今ここがどう見えているのでしょうか。

進藤冬華(以下、進藤):私はここが自分のホームだと思っているので、この場所を見るとき感情的になってしまいます。それは別の場所で活動する時にお客さんとして地域を観察するのと大きく違うところです。正直札幌があまり好きじゃない、居心地が悪い。それでもここがホームであり、ここで暮らしていることが呪いみたいだと思っています。

佐藤:進藤さんが感じる呪いは、どんな呪いなんですか?

進藤:個人的には地域の歴史を考えても明るい気持ちにならないし、人間関係も閉じていて、互いへの関心も薄く、疎外感があります。あまり好きじゃないとはいえ、ここに育てられ今の自分があるのも事実です。こうした矛盾もドロドロとした感情にさせるのかも。そうであってもここで美術家として人として常にチャレンジし続け、さまざまな人と関わり続けたいとは思っています。それがいつかこの場所に育てられたことの恩返しになったら嬉しいです。

石田:すごくわかります。僕は実家は名古屋だけど、名古屋にいるのが嫌だったから捨てた人間で、もう今向こうに住みたいという気持ちはない。でもどこかでちょっと後ろめたさがあって、ずっと住んでいる人の闇的なものは、逆に僕にとっては尊敬すべきところになるという複雑な気持ちがあります。札幌は実家との中間みたいな感じがあり、名古屋にある呪いから逃げて中間のような場所にいるという感覚があるので、僕からすると札幌は住みやすい。いろいろ問題はあるけれど、それぞれの土地にある問題を比べてみるとこのぐらいだろうね、みたいな。札幌は良い街ですよ。

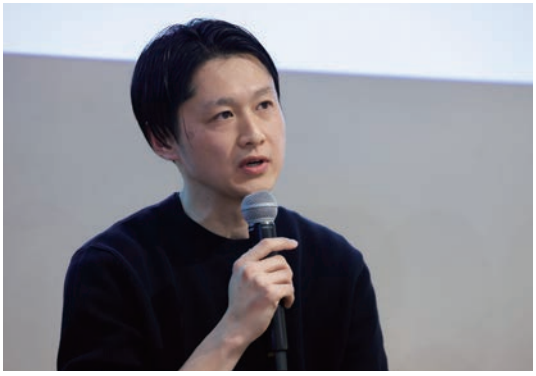
札幌と他都市の違い―アクセスとコミュニティ

樋泉：ここからは、皆さんからそれぞれ聞きたいことなどを質問していただければと思うのですが、内田さん、どうでしょう？

内田：聞きたいことではないですが、先ほど話題に出た札幌の印象で言いそびれたことを…。私が住んでいた東北も雪国って言われますが、札幌と印象がだいぶ違いました。東北にはどん詰まりで熟成されている感というか、こちらの想像が及びもしない進化をしているものがいっぱいあって。キリストの墓も、地域の人がキリストのために盆踊りを踊ったり、さらには嘘かどうかに関わらず、キリストを大事にしてくれてありがとう、ということで、エルサレムから友好の証の石碑を贈られたりしているんです。東北って本州ですが、LCCもほとんど飛んでないし、札幌よりよっぽど外に出づらいです。だからこそ、外の目が入りにくい状況で熟成されてきた文化があるのかもしれないと感じます。そこに住む美術関係者って、やっぱりそういう文化に興味のある人が多いから、都市では思いつきにくい美術の手法とかも生まれるのかもしれません。北海道は東京や関西へのアクセスが心理的にも金銭的にもだいぶ楽だと思います。だから熟成されるというのが少ないのかもしれないですが、東北にいるときより展示など見てもらいやすくなったと感じますし、流通しやすいとも言えるのではと思っています。札幌の生活は東北と関東の中間にあるような印象です。

平川：皆さんは道内外の移動はどのくらいされているんですか？

進藤：レジデンスに行けば2〜3カ月出ています。他に展示でも出たりするので、（札幌に）ずっとはいないです。それは良いこともあるし、悪いこともある。拠点があると継続して長く関わるものができるということだと思うのですが、離れるとそこで途切れるからできなくなったりすることがあったり、1年で1サイクルのものはできにくいとか、そういうのはありますね。



佐藤：僕は今は月に1〜2度程度しか道外に出ない状態です。ロンドンに住んでいた頃は1〜2カ月帰ってこないということもよくあったのですが、札幌に帰ってきてからはまだ1回も国外には出ていない。札幌で集中して何かを制作している時間が楽しくて、その時間がとても貴重だと感じています。それがなぜなのかは、わからないのですが。もしかしたら今後、また外に出たくなるときが来るのかもしれませんが、今は制作に集中できる良い場所だと思っています。札幌に住み始めて3年ちょっと経って、幸いなことに少しずつ芸術文化に関わる方とお会いすることも増えてきました。小町谷さんは、札幌の芸術文化のコミュニティに対して何か思っているようなことはありますか？

小町谷：そうですね、僕は東京出身なのですが、東京だと例えば展覧会を観に行こうと考えたときに、東京都現代美術館に行った帰りにどこかのギャラリーもハシゴして…というように選択肢がたくさんある。札幌だと、展覧会やアーティストが出入りする機会は、東京と比較してしまうと多くはないのかなと思います。そういう意味では地元で活動している方々とコミュニケーションする機会が非常に多くなるし、どうしても一つのコミュニティの中でやっていくことになるので、心地良さと同時に居心地の悪さを生み出すことにもつながってくる可能性はあるのかなと。僕は札幌に来てから10年くらい経ちますが、外から人が来たり、新しい人が移住してきたりする機会は増えてきているように思います。コミュニティも小さいなりに協力し合って芸術文化を盛り上げようとしているし、外からもいろいろなアーティストや専門家の方が来られてコミュニケーションを図っていて、前向きに言うと盛り上がってきている印象はあると思います。もう少し選択肢が増えるところまで札幌の芸術文化が元気になってくると、もっと面白くなるのではないかなと感じています。

佐藤：キュレーションできる立場にある樋泉さんには、もどかしさのようなものはあったりしますか？僕が日本に住んでいた頃はSCARTSがまだなくて、帰ってきて最初にSIAFラボの除雪の展示を観たときには感動しました。こんなに強度のある作品を観ることのできる施設が札幌にあって、こういうチームがいるんだというのが嬉しかった。ただ小町谷さんと話していると、SIAFラボは作家性というよりも、研究だったり、アクションを起こしていくようなところだと。平川さんが先ほど言っていた「自分たちが心の感覚からスタートしていない」というようなところも、（札幌の都市機能と自然環境をテーマとして扱う）構造的な問題として、そうできないというところもあったりすると思うのですが。樋泉さんはその辺をどのように感じていらっしゃるのか、外のアーティストをどのように入れていきたいのかなどを聞いてみたいです。

樋泉：SIAFラボの活動について、先ほど平川さんが「呪い」とおっしゃっていましたが、札幌のことを必ずテーマにしなければならないという制約は、確かに市の関連の仕事をしているとある程度あります。私は以前、本郷新記念札幌彫刻美術館や札幌芸術の森美術館に勤めていましたが、地域の公立美術館の場合、ローカルのアーティストを紹介するということが館のミッションになっていることが多いです。SCARTSは新しくできた施設で、美術館でもないため、明確にそういった縛りがなかった。道外からもアーティストを招聘して展示をするということが、SCARTSではやりやすいと思いました。なので、ローカルで活動している方と道外のアーティストの両方を交えて展覧会をするということは、意識的にやってきたことでもあります。それはアーティスト同士の交流や観る側にとっての刺激になると思ったからです。佐藤さんのさきほどのお話の中で、籠もって集中して制作する環境としての札幌ということが印象的でした。地域のアーティストと話していると、「札幌から外に出るチャンスがほしい」、「外から評価されたい」という話を聞くこともあるのですが、もしかすると、あえてここから出ず、ここに来ないと作品を観ることができない、という姿勢を積極的にとるというアプローチもあり得るのかななどとお話を聞いて考えていました。

札幌にアートは必要なのか問題
―逆に札幌に必要なアートとは何か？

樋泉：平川さんにお聞きしてみたいのですが、平川さんはSIAFラボのメンバーとして活動しつつ、今回のSIAF2024ではSCARTSコートの《INTO SIGHT》にアーティストとして出品しています。札幌で平川さん個人の名義で作品を発表する機会は今まで少なかったと思うのですが、その辺りどうでしょうか。

平川：ものすごい人数の方が観にいらっしゃっているという話を耳にして、展示会場に入るとものすごい数の人がいるのですが、一方で感想がどこからも聞こえてこないという不思議な状況があり、一体どのような人たちが、どういったモチベーションで観に来ているんだろう、というのが正直な印象です。いろいろなところから札幌に観に来てもらうことも可能かもしれないという話が出ていましたが、札幌にアートを観に来る人はいるのかと疑問です。札幌にアートが必要なのかというのも疑問です。作家が住んで制作する環境としては面白いと思うんです。歴史も特殊だし、自然環境も特殊だし、いろいろなものが刺激になることはある気がするのですが、佐藤さんもおっしゃっていたように星を眺めてキャンプしている方がいいじゃんというのは常にあります。冒頭の札幌の第一印象について思い出したことがあるのですが、札幌に来てすぐに仕事でしばらく札幌を留守にしていて、久しぶりに戻ってきたときに何かのトークに呼ばれたことがあって。「札幌どうですか？」と聞かれて、「札幌でオラファー・エリアソンやジェームズ・タレルを見ても、多分あまり感動しないよね。見たい人っていないんじゃないの」みたいな話をしました。周りに見るべきものがたくさんあるし、ご飯もおいしいし、そこでアートって本当に必要なの？とすごく思ったのですが、北海道民として「アートは必要なのか問題」はどうですか？

船戸：その話で言うと（SIAFラボが2021年に発表した）除雪彫刻の話を最初に聞いたとき、雪のあるところで育った身としては「何で？」と思って、見慣れたものを切り取ることが不思議でした。確かに平川さんが言うように、山の中を車で走っていると心が洗われますし、夜景を見に行ったり釣りに行ったりしてもそうなのですけど、逆にアーティストの心象風景や内面にあるものを形にした作品に触れる機会や場所は少なかったと思いました。

除雪彫刻は札幌のことをテーマにするという構造的なところからスタートしていますが、掘っていくと平川さん、小町谷さん、石田さんの雪に対する内省的なものが現れている展示なのかなと個人的に思いました。

樋泉：SIAFラボが取り組んできていることは、生活の中で鬱陶しいものと思われがちな雪に対する外からの視線に基づいていて、札幌の街の面白い見方を示してもらっていると思っています。「札幌をアートでどう見るか?」という視点は、住んでいる人の認識や価値観に働きかける重要なものだと思います。

小町谷：「アートは必要なのか問題」についてですが、例えば東京で街を歩いていると「信号が赤になったら止まりなさい」とか、「自転車は歩道を走ってはいけない」とか、基本的にルールの中で生活していますよね。そういう理屈では体験し得ないような意味や価値というものを体験できるスペースとして東京ではギャラリーを利用するわけですが、こちらに来てみると、論理で動かない体験というものがたくさんあるんですね。釣れると思ったら釣れなかったとか、キャンプに行って暖かいと思ったら寒かったとか、この街ではそういうことを非常にすぐに体験できる。そういう中で、これまで都市の中で機能していた美術の役割とは違う役割みたいなものができたら面白いのではないかと。テクノロジーを使って都市と自然の間をつなぐことによって、その中から違う美術のあり方が少しでも見えてきたら、札幌の文化や芸術の特徴をつかまえられるのではないかなと思って活動しています。とは言え、外に出ると雪も海も美しくて、これに敵うものを作るというのはすごく難しいなと思います。その辺のバランスの取り方を考えられたらなと思っています。自然がこれほど近い札幌で制作するというところで、他の都市にはないモチベーションがあるのかを3人にお伺いしたいのですが、いかがですか。

内田：アートが必要かという点について、私は自然など崇高なもののシミュレーション以外にもアートはいろいろできると思っています。人間が作った正しさとか規範に問いを投げかけたり、新しく作り替えるということもアートだと思うし、アートにはいろいろな体験があるから、自然が豊かだからといってアートがいらないということにはならない。私はブラジルのカポエイラが好きなのですが、奴隷が本当はしてはいけない格闘技の練習をするために、踊っているようにトレーニングをしていたことから、今も舞踊のような格闘術として残っている。別に格闘技の練習をしても良い状況だったら、踊っているふりをしなくても良かったわけで、制限があるからカポエイラのようなものが生まれてくるところが面白いと思う。札幌ではできないことがひとつあったとして、そこから何かを生み出すこと、そこから生まれたものが分類されるジャンルがアートなのかどうかはわからないですけど、そういうことがすごく面白いと思います。そういった意味で、雪もその何かになるのではないかなと思いました。

平川：札幌で面白そうだなと注目しているものはありますか?

内田：まだリサーチを深められていないのですが、先ほど話したオホーツク信仰や擦文文化に注目しています。リサーチでは考古学者の方にお話を聞くことが多かったのですが、考古学だと、当たり前ですが根拠のない想像で物語を語ることは許されません。それに対して、網走の民芸店「大広民芸店」の方が、北海道に移り住んでいた北方民族や、アイヌの物語をあつめて、彼らの作る木像をお手本に、オリジナルのお土産としてアレンジして木の彫刻を作っていたんです。考古学的な立場からすると、北方民族のつくる「お手本」の像と混同されて誤解されかねないという懸念もあるそうですが、北方民族の物語を現代に生きる身体をもって更新して語り直していると感じ、それをお土産として流通させているところも、物語の新しい流通のあり方を発見した感じがしました。大広民芸店の彫刻は、無印良品の「福缶」という企画で販売されたり、Instagramでバズったりしているそうで、現代的な流通網を通して北海道に住む北方民族の物語が流通していくことも興味深いです。

佐藤：内田さんが言っていた「ただ美しいものだけがアートではない」という点に同感です。価値の転換などは、それにあたると思います。例えば最近作品で扱った白石遊郭のように「すでにそこにあるもの」を再構成することは、もちろん自分のリフレクション（内省）も入ってきますし、やりがいのあることだと思う。偶然性の中に自分が入っていって、プロセスなどが無秩序に広がっていくようなところから予期していなかったことが入ってきて、それが結実していくプロセスはアートを生み出すときに自分が大切にしていることでもあります。そのことを札幌が気づかせてくれたところもあって、歴史がないと思っていたのが僕の出発点でしたが、でも歴史はちゃんとあるんだと気付いて、自分は今それを捉えなおしたいという思いもあって活動している。それは北海道という土地の持っていたものが、自分自身の今の制作プロセスに与えてくれているものだと思います。

進藤：私は活動しながら、やりたいことを何とかアートの枠組みの中にねじ込んで成立させているという感覚がすごいあって、それはここにいることも関係していると思います。例えば日本や世界の中で、北海道をマージナルな場所と見ると、文化や歴史、地理的、美術状況も含めてズレていることがここにいる人々に何らかの影響を与えていると考えるような。個人的にはズレていることと折り合いをつけることが長らく活動の原動力になってましたが、それと今は折り合いをつけるのではなくズレを自分の一部と考えることで自由になれると感じています。

SIAFラボの「アートは必要なのか問題」は、もっと自分たちの欲望に忠実にやってもいいのかなと思いました。SIAFラボとしての属性や美術を一旦脇に置いて、もっとぶっちぎって好きなことをしても本当はいいはずだと思うんです。

佐藤：僕もぶっちぎってほしいなと思います。

平川：いやでもそれはね、ぶっちぎりたければ個人でぶっちぎればいいので。SIAFラボはアノニマスなチームとして何ができるか、誰が作っているのかよくわからないしニュートラルだけど癖のある、「これは何だろう？」とクエスチョンマークがつくようなものをチームとして作ることはできるのか、ということを考えるのが一つのコンセプトとしてあるので。僕は個人としても活動しているので、SIAFラボはチームとして誰も個性を発揮せずに、どうやっていいものを作ることができるかという実験だと思っています。誤解を生んでいそうな気がするので一言だけ言いたいのですが、僕も「札幌にアートはいらない」と思っているわけではないです。ただ一つ言うとしたら、オラファー・エリアソンやジェームズ・タレルを例に挙げたように、札幌に住みながら自然の中にあるスペクタクルなものをわざわざ作ったり、スペクタクルなものを美術館へ観に行くモチベーションがどこまであるのかということ。逆に言うと、とんちが利いたもの、という言い方が正しいかどうかわからないけど、皮肉めいたものや人間が作ったものに対して裏をかくようなもの、ひねりの利いたものを北海道の人は欲しているのではないかと思う。街中で散見するものはあまりにもキラキラして表層的なものばかりなので、そこは不満です。

石田：自分が札幌に来てクリエイティブに接点を持ったのは、24年前なんですよね。その当時、札幌はデザインが強かったです。「アートは必要なのか問題」について、狭義のアートとして見るのであれば、多分弱いと思う。だけど表現というところでは音楽もあり演劇もあり、もちろんデザインもあり、当時からある程度のポテンシャルは持っていたと思うんです。今は多分アートに興味のある人たちがこうやって集まっているけれど、それ以外の表現媒体はいくらでもあるので、それをフラットに見ていく時間的な経緯も必要だと思うし、その歴史の積み重ねはどこかに共通点があると思う。一番年上で一番見てきた人間からすると、「アーティストが語る」の「アーティスト」をどう捉えてここに登壇してもらうのかというところで、「札幌の今」を語るにはやっぱりちょっと足りないのかなと思います。いろいろな面で語ることのできる分野の人たちが集まってくると、もう少し形作られるような気がします。もっとハイブリッドなジャンルの人たちがそれぞれの見え方を語る中で見えてくるものもある気がするので、続けてやったらいいのではないかと思いますね。札幌はサブカルチャーも強いですし、文化的な表現の層はいくらでもあると思います。

アーティスト／観客、内／外の視点の交差が街を面白くする

樋泉：だいぶ残り時間が少なくなってしまったのですが、会場から質問はありますでしょうか？

来場者：面白いトークをありがとうございました。感想になってしまうのですが、平川さんのお話が胸に刺さったのと、皆さんのお話を聞きながらストックとフローについて考えていました。札幌駅前通地下歩行空間には、真ん中に白いエリアと両脇に黒いエリアがあります。白いエリアは人が流れていくフローの部分で、黒いエリアは物販や展示などを行うスペースであり、人がそこに留まることができるストックの部分です。このフローとストックの棲み分けが、あの空間を面白くしています。札幌という街も、ストックで勝負するより、常に一定のパーセンテージでフローがある状態で勝負していくのが良いのではないかと思いました。SIAFラボの皆さんの議論を聞いていて、アーティストのフローが常にある状態が、札幌を今後も面白くしていくのではないかと感じました。キュレーターや観客、感性といったところも、ストックとしてではなくフローで揃えていくやり方もあるのではないかと思います。アーティストの方々のフローが、文明の行き詰まりに対して風穴を開けてくれているのではないかなと思いました。

樋泉：ご感想ありがとうございます。では最後に皆さんから一言ずついただいて終わりにしたいと思います。

小町谷：芸術祭が続いてきたことで、街の認知度も上がって参加される方も増えてきていて、今日もこんなに多

くの方が聞きに来てくださいました。SIAF2024のトークにも過去のディレクターが来られたりしていて、回数を重ねてきたのだなという印象が今年はありました。先ほどの感想も非常にありがたくて、そういったものをもらいながら、ラボとしてまた次へつなげていけたらなと思いました。

石田：どんな都市でも問題はありますし、良さもあると思います。芸術祭はもちろん、そもそもの文化活動や環境というところもそうだと思うのですが、全部我々が市民の一人として日常的に積み重ねて作っていくものだという当事者意識が必要なのではないかなと思います。その中で、ラボとして何かを出していくことを続けていこうと思っています。

船戸：ずっと頭にあることですが、よそ者が来て失敗できる街がいいなと思っています。函館や小樽が港町ということで色々な人が交流しその時代の中で栄えていた時期があり、札幌も外から来た人と元からいる人たちがそういったイメージでわいわいやりながらいろいろできる街であってほしい。外から来た人から学ぶ機会があることで新しい発見がありますし、テクニカルをやる中でもその楽しさを感じているので、そんな街になってほしいと思います。

平川：やっぱり大事なことはわかりにくいと思うんです。わかりにくいけれど、それが大事だと感じた人は、その後考えるじゃないですか。考えるんですけど、考えることに頭を使っているものだから、「あのトーク良かったよ」と言うのを忘れるんですよ。その問題は結構重大で、逆にわかりやすいものだと脊髄反射的にみんな「良かった」と声を大きく言ってくれる。わかりやすいものが大切でないとは言わないけれど、本当に大切なものはやっぱりわかりにくい、特に現代の問題って複雑なので、その場で答えに辿り着くような議論は少なくなってしまうと思うのですが、そういうものに出会ったらきちんとリアクションを返してほしい（笑）。ぜひ何とか言葉にして頂けると、面白さを共有できて楽しいと思います。

内田：今日話していて、そういえば学生の頃に巨大で自然の崇高さをシミュレーションしようとする作品に対して、「何でやってるのかな、自然を見ればいいじゃん（勝てるわけないよ!）」と同級生と話したなと思い出して、自分がアートのどこを大事に思っているのかを思い出せて面白かったです。個人的にはオタモイ地蔵尊や恵山の地蔵信仰のことを聞いているので、そういうところへも足を運んで、青森での活動からつなげていけると面白いかなと思っているところです。

佐藤：以前展示のときに、札幌で作家活動をしていることに対して「それって趣味？」と言われたことがあって、すごくモヤモヤさせられたことがありました。その人は最終的に「良いものを見た」という気持ちになってくれたみたいで、帰っていかれたのですが、先日北海道立近代美術館に芸術祭の展示を見に行ったときに、その方が中に入っていくのが見えて。その瞬間に、自分が活動していることでまた一人こうやって観に行く人が増えてくれたんだと思えたことが、喜びとして自分の中にありました。それはポジティブにこれからもやっていこうと思えるような経験で、今日も札幌がこれからどんどん盛り上がるといいなとすごく思いました。

進藤：平川さん、私は意外と反応はあると思います（笑）。ここはなかなか反応が得られない場所だというのは確かにそうだけど、私はあったことがある。だから多分大丈夫です。

樋泉：ありがとうございます。ご来場の皆さん、本日は長時間にわたってありがとうございました。SIAFラボの皆さん、内田さん、佐藤さん、進藤さん、ありがとうございました！

登壇者プロフィール

SIAFラボ（メンバー：小町谷圭、石田勝也、船戸大輔、平川紀道）

SIAFラボは、札幌国際芸術祭（SIAF）の下、多様なプロジェクトの集合体として生まれ、2015年から実験的なプラットフォームとして活動を続けています。アートプロジェクト、研究開発、人材育成を三つの柱とし、それらを融合させて多彩なプログラムを実施。SIAFのテーマ「都市と自然」に焦点を当てた、多様な文脈における事物の再考と、そのローカルへの再接続を通じて、札幌独自の文化・芸術の醸成と発信を目指しています。

内田聖良（アーティスト）

情報科学芸術大学院大学［IAMAS］修士課程修了。アーティスト、リサーチャー。また、自身をポスト・インターネット時代のベンダー（Bender）と称する。AmazonやYouTubeなどのサービスも活動の場として取り込みながら、規範的な価値観や物語に問いを投げかける。近年は民話や信仰のリサーチをもとに、現代における物語の流通や記憶の共有のあり方について探求し制作している。主な作品に、使用感のある古書を一点物として価値づけ再流通させる《余白書店》、VRや3Dスキャンを用いて捨てられない物を供養する《バーチャル供養講》など。

佐藤壮馬（アーティスト）

1985年、北海道生まれ。モノやイメージ、個や社会に内在する自明ではないものや逃れられないものとの関係性について考察し、多分野にまたがるアプローチを写真・映像・彫刻・インスタレーションなど様々なメディアに反映させている。近年の主な活動に、第23回文化庁メディア芸術祭アート部門審査委員会推薦作品選出（2020）、KyotoSteam2022（京都市京セラ美術館）、第16回shiseido art egg賞グランプリ（2023／資生堂ギャラリー）など。東京、ロンドンでの活動を経て、現在は札幌を拠点に活動。

進藤冬華（アーティスト）

北海道の歴史や文化、環境に対峙する方法としてフィールドワークを中心とした活動を行い、そのプロセスや体験をベースに作品制作やイベントを行なってきた。近年は活動が行われている現場、活動体験の記憶や記録へ興味が広がっている。これまでに参加した主な展覧会に札幌国際芸術祭2014（札幌駅前通地下歩行空間、札幌）、「六本木クロッシング2022展:往来オーライ!」（森美術館、東京）など、札幌を拠点に国内外での活動を行う。札幌生まれ江別在住。

構成：松田仁央

写真 © 札幌国際芸術祭2024 撮影：門間友佑